**陸奥外交の原点とは**

**―影響を与えた出会いから探る―**

**3年　保久村達朗**

**1.はじめに**

　陸奥宗光といえば、第2次伊藤博文内閣の外務大臣として不平等条約の改正や日清戦争、およびその講和条約である下関条約の締結に大いに貢献し、近代日本における外交を形作った人物として有名である。私は近代外交史について勉強していく中で陸奥宗光の業績というよりもむしろ彼の行動理念の原点が何であるのかに大いに興味を持った。彼の人生は外務大臣在任時が大いに有名であるが、その前半生を調べていくと幕末から明治の前半という激動の時代を生き抜く中で彼の才覚がどのように育まれ、活かされていったかが見えてくる。今回は彼の人生の中で影響を与えたであろう出会いについて見ていくことにした。

**2.陸奥宗光の略歴**

　陸奥宗光は1844年に紀州藩士伊達宗弘の子として誕生した。父宗弘は国学者であり、藩に深く仕えていたが陸奥が９歳のときに藩内の政争に敗れ失脚、陸奥はじめ家族も和歌山城下から追放され、困窮を極めていった。１５歳の時に江戸に出て苦学を行う⁽¹⁾。１９歳の時に父宗弘が赦されて和歌山に戻ってくると陸奥も和歌山に帰省する。しかし、宗光はすぐにまた江戸に旅立ち、宗弘とその養子（つまり、陸奥の義兄）の宗興は脱藩し、京都にて勤皇活動をするようになる。陸奥はこの時の江戸滞在時に桂小五郎⁽²⁾、乾退助⁽³⁾、伊藤俊介⁽⁴⁾と知り合いになっている。その後、京都の宗弘のもとに寄宿した際に坂本龍馬と知り合う。それ以降、龍馬の海援隊に参加するなど龍馬と行動を共にした。その後、明治新政府の外国事務局御用掛に任命されることで彼の政府での仕事が始まった。しかし、初代神奈川県令などを務めた後に台湾出兵などの政府混迷の中で一度職を辞している⁽⁵⁾。その後、大阪会議を経て設置された元老院に参加して政界復帰。ところが、西南戦争期の土佐立志社の政府転覆計画に連座して投獄されてしまう⁽⁶⁾。出獄後、伊藤の勧めもあり欧州遊学を行う。帰国後、在米公使などを経て山縣内閣の農商務大臣に就任する。松方内閣でも留任したが、選挙干渉問題に際し内閣の他の大臣と対立、辞職している⁽⁷⁾。その後、第二次伊藤内閣で外務大臣に就任し、不平等条約の一部改正、日清戦争の遂行とその事後処理に活躍。しかし、この時すでに肺結核が進行しており⁽⁸⁾、1896年に外務大臣職を辞職、一年あまりの闘病生活を経て1897年に死去した。

**3.陸奥外交とは何か？　～陸奥外交の評価～**

　さて、陸奥外交の原点を探る前にそもそも陸奥外交とはどういうものなのかを確認しておく必要があるだろう。陸奥が外務大臣在任中に行ったこととしては、

* 1. 不平等条約の一部改正、すなわち日英通商航海条約の調印にこぎつけた。
  2. 改正に伴って有利な条件で日清戦争開戦はできたが、それに際し、念のため列強諸国を刺激しないよう振る舞い有利な条件で講和条約に持ち込んだ。
  3. 三国干渉時に強硬論が渦巻いていた国内において可能な限り最大の成果を日本が獲得できるように（つまり、余り列強を刺激して清との講和が不調に終わらないように）した。

という点があげられるだろう。

一般的には陸奥外交は圧倒的な成功例として語られ、例えば陸奥宗光伯七十周年記念法要にて吉田茂⁽⁹⁾が述べた式辞では、「更に伊藤内閣に　外務大臣の重責を帯ぶるや維新以来　挙国待望の条約改正に不滅の大功を建つ　次いで日清戦役および三国干渉に、渾身の英知を傾けて国難を排除し　大日本の進路を開く　この間に於ける　伯の苦心経営は人語の及ぶところにあらず　実に蹇蹇匪窮の名に値す」（『陸奥宗光伯－小伝・年譜・付録文集－』　1966年　陸奥宗光伯七十周年記念会編・発行）と語っており、陸奥に対する賛辞を述べている。

中塚明氏の『『蹇蹇録』の世界』（1992年　みすず書房）によると、陸奥外交の歴史的な評価は時代によって変化を遂げているようである。陸奥の生前期から陸奥に関する出版物は刊行されていたが、当初のものは「三国干渉を招いたことについての激しい非難に終始」（『『蹇蹇録』の世界』p.200）しており、当時は蹇蹇録が外交的に重要な文書として出版禁止状態であったために陸奥の真意がわからず、彼に対する評価が定めにくかったようである。

その後、蹇蹇録が出版されたこと、また当時満州事変からの十五年戦争に突入しようとしていた時期であったがために陸奥待望論が出てきている。すなわち、日清戦争期に日本の権益を最大限死守するために尽力した人物として日本のために最大限の行動ができる人物を民衆が求めていたということだろう。

また、戦後になると、陸奥宗光という人間の外交観を形作っていった時期に関する研究が盛んになったようである。萩原延寿氏の『陸奥宗光紀行』（『日本の名著　35　陸奥宗光(1973年　中央公論社)』に収録）では、出獄した後に伊藤の勧めで欧州遊学を行い、かつて伊藤が師事したシュタインに個人教授を請うた陸奥の勉強熱心さが記されている。

陸奥外交はこれまで日本外交の成功例であるとともにまた、帝国主義的性格を持つがゆえに朝鮮、中国においての後々への混乱を引き起こしたと見る向きもある⁽¹⁰⁾。今回はそれに対して考察を加えるわけではないが、陸奥がとった行動、立ち回りの遠因となった出来事について見ていくには彼の前半生について確認しておく必要があるだろう。

ということで、次の部分からは陸奥の外務大臣着任以前で彼の行動に大きな影響を与えたであろうことを少し踏み込んでみていきたいと思う。

**4.陸奥宗光を形作った出会いについて**

陸奥宗光の人間形成において大きな役割をはたしたのは父の伊達宗弘であろう。彼は紀伊藩の家老であり、藩の勘定奉行、寺社奉行を務めるほどの人物であった。また、「大勢三転考」という歴史書を著述してもいる。しかし、彼が陸奥に対して大きな影響を与えた部分として、宗弘が脱藩して以降の京都での活動があげられる。勤皇運動に参加し、陸奥を坂本龍馬に引き合わせたのだ。龍馬は陸奥の才覚に気付き、勝海舟の海軍操練所に推挙する。海軍操練所が勝の海軍奉行罷免により離散すると陸奥は坂本龍馬と行動を共にする。

なお、当時は脱藩していた都合上土佐藩士や薩摩藩士を名乗っている。このことの名残は陸奥が明治新政府で初めて与えられた官職である外国事務局御用掛に任ぜられた時の陸奥の手記に「先き余は生国和歌山藩を亡命し勤皇攘夷の説を唱へ常に江戸長崎京坂又は薩長土の間に奔走し或は薩摩の藩籍を称し或は土佐の藩籍を称し以て幕府及び本藩の追捕を避け居たるが故に本日拝受したる辞令書にも土州陸奥陽之助なる肩書ある所以なり」（『伯爵陸奥宗光遺稿』陸奥広吉著　1929年　岩波書店）とあることからもわかる。なので、まずは坂本龍馬の影響について見ていくことにする。

**4-1.坂本龍馬との関係**

　坂本龍馬は陸奥の若年期の人間形成に大きな役割を果たした人物である。宗弘が京都で活動していた時期に龍馬は宗弘の家を訪れていたらしくそこで宗光との出会いを果たしている。その際に龍馬は陸奥に日本の今後について説き、その後の行動を共にする礎を築いている。龍馬は陸奥のことを高く評価していたようで、龍馬は海援隊にいた時期に「我隊数十の壮士あり然れども能く団体の外に独立して自からその志を行ふを得るものは唯我と余のみ」（『陸奥宗光伯　－小伝・年譜・付録文集‐』）と語っている。

　また、陸奥も龍馬につき従っていただけあり龍馬に心酔していたようで、陸奥の絶筆となった『後藤伯』(『陸奥宗光伯　－小伝・年譜・付録文集』に記載)において「坂本龍馬は近世史上の一大傑物にして、その融通変化の才に富める、同時の人能く彼の右に出るものあらざりき。」と評している。

　こうして互いに認め合った陸奥と龍馬は海援隊において緊密な連携を見せ、陸奥はこの貿易結社に在籍して海運や商事を学んだことで外国との交渉の重要性を理解したのだろう。龍馬が暗殺されたのち、陸奥は龍馬暗殺後紀州藩士三浦休太郎を犯人と決めつけて復讐戦を挑んだというエピソードも残っている⁽¹¹⁾。その後、大阪に赴き当時英国公使館の通訳を務めていたアーネスト・サトウを通じて英国公使パークスと面会する。この時までに「王政維新後の外交における処理に就き深く談論するところあり」（『陸奥宗光伯　－小伝・年譜・付録文集』より）に見えるように英国公使と激論を交わせるほどの学を身につけていたようだ。語学力はともかくとして、外交処理に関して話し合ったというのは坂本龍馬に海援隊での貿易交渉を任されていたという部分も関係があるだろう。そして、パークスと話し合った結果を岩倉具視に即座に持って行ったようで、このことが陸奥を外国御用掛に任命した契機となっている⁽¹²⁾。

父親が勤皇運動を行い、攘夷志士と交流を持っていた中でともすれば陸奥自身も攘夷運動家として生涯を終える危険性もあっただろうが、龍馬との出会いによって外国に目を向けなければならないという認識が陸奥の中で強くなったと言えるだろう。

　他に龍馬が宗光に与えた影響として、交渉力があげられるだろう。陸奥は海軍操練所在籍時に仲の悪かった薩摩藩士と刃傷沙汰になりかけるなど、弁舌が立つゆえに周りとうまくいっていなかったようなのだが、龍馬が薩長同盟を結ぶために暗躍し、更には大政奉還が行われるように立ちまわったのを見て強い影響を受けたようである。『後藤伯』には「彼の魯粛⁽¹³⁾は情実、行かかり、個人的思想を打破して、呉蜀の二帝を同盟せしめたる⁽¹⁴⁾に止る、坂本に至りては、一方においては薩長土の間に蟠りたる恩怨を融解せしめて、幕府に対抗する一大勢力を起こさんとすると同時に、直ちに幕府の内閣につき、平和無事の間に政権を京都に奉還せしめ、幕府をして諸侯を率いて朝廷に朝し、事実において太政大臣たらしめ、名に於いて諸侯を平等の臣属たらしめ、以て無血の革命を遂げんと企てぬ」と書いており、三国時代の呉の名政治家魯粛の考えていたことをはるかに上回る新時代に向けた無血革命を起こすために1人でその立案をしていたということになるが、陸奥はこの龍馬の考えを大いに評価し、龍馬の考えに反して倒幕のために立ちまわった薩長の人間たちを「失敗の悪魔」とも述べている。陸奥の藩閥政府嫌いは公武合体の考え方に理解を示していた時期にそれを壊してしまったこの時期が影響しているのかもしれない。

**4-2.伊藤博文との関係**

　先ほど述べたとおり、陸奥は藩閥政府嫌いであった。『後藤伯』の最初の部分に、「夫れ西郷⁽¹⁵⁾は城山の露と消へ、大久保⁽¹⁶⁾は空しく墓標を清水谷に止め木戸の名また語るものなく」と明治新政府樹立に主導的な役割を果たした三人に対してかなりひどい扱いをしている⁽¹⁷⁾。しかし、同様に新政府の中核に座った伊藤博文とは日清戦争の講和条約である下関条約で二人が全権であったのを代表として第二次伊藤内閣において陸奥が外務大臣であった時に緊密な連携をとれていた⁽¹⁸⁾。しかし、陸奥の人間形成について見ていくのであればやはりそれ以前の伊藤と陸奥の関係についても確認していく必要があるだろう。

　陸奥が初めて伊藤と会合したのは陸奥が江戸で学んでいた時期のことであるらしい。しかし、この時期についてはそこまで詳しくは書かれていない。そこで、陸奥の人生に伊藤が大きく寄与した時期を考えてみると、陸奥が投獄されていた時期、そしてその後の欧州遊学の時期になるだろう。陸奥が土佐立志社事件に連座して投獄されてしまった時、伊藤は陸奥が不自由しないように当初幽閉されていた山形監獄から当時最新の設備が整っていた仙台監獄へ移している。伊藤のこの決定が無ければ監獄の中でもかなり厳しい環境であったと言われる山形監獄では陸奥は勉学に打ち込むことができなかったであろう。さらに、陸奥の刑期短縮にも一役買っている。春畝公追頌会編『伊藤博文伝』によると、「陸奥、大江等の事は廟堂に異議なき事に御座候えば、何卒寛典に処せられたく存じ奉り候」（明治十五年八月十一日付、ここでは萩原延寿『陸奥宗光紀行』より抜粋）と書いており、陸奥宗光という人物の必要性を痛感していたようである。また、陸奥が出獄した後、伊藤博文が欧州遊学から帰ってくるが、伊藤が欧州遊学すべきと口添えしたことによって陸奥は欧州遊学を決意した。この時の金銭的費用については、「伊藤を仲介にして、井上馨や渋沢栄一の援助があったらしいことは、想像にかたくない（たとえば、サンフランシスコ発、明治十七年五月十二日付）」（萩原延寿『陸奥宗光紀行』）となっている。実際にその時の陸奥の妻にあてた書簡を見てみると「大分井上、渋沢らより心配いたしくれ申すべく候まま、くれぐれも御案じ下されまじく候。」とあり、井上馨、渋沢栄一も陸奥の渡航に一役買っていたことが推察される。

伊藤の陸奥に対する影響としては、欧州遊学のきっかけを作ってシュタインに陸奥を引き合わせた（間接的に陸奥の政治に関する見方を作っていったとも言える）事ということになるだろう。後は外国御用掛を共に仰せ付かってからの交友ということになるだろうか。

ともかく、伊藤の助力で欧州遊学を果たした陸奥だが、獄中でベンサムの著作『An Introduction to the Principles of Morals and Legislation』（道徳及び立法の諸原理序説）を邦訳し、『利学正宗』というタイトルで出版している。この著作は陸奥の欧州遊学を決心させるのに大きな影響を与えているのでそれについて見ておこう。

**4-3.ベンサム『An Introduction to the Principles of Morals and Legislation』が与えた影響**

　まずはベンサムがどういう人物であるかについて見ていかなければならないだろう。ベンサムは1748年にイギリスで生まれた法学者である。イギリスでは当時自然法が主流だったが、ベンサムは功利主義を唱え、法律の明文化を進めるべきと唱えた。「最大多数の最大幸福」という言葉が彼の思想を体現する言葉としてよく用いられるが、個々人の幸福の総和を最大にしていこうという考え方である。陸奥がこれを読み、訳するに至ったからにはその考え方に共鳴するものがあったのだろう。『利学正宗』の凡例では、「便氏ノ著書ハ渾テ実利主義ニ出テサルモノナシ就中此書ノ如キは最モ丁寧反復シテ同主義ヲ演繹スルモノ多シ故ニ之ヲ訳シテ利学正宗トス」と記されている。ベンサムの著書に触れていく中でこの本を訳すことが最もベンサムの思想を紹介するのに役立つと考えたようだ。

ではなぜベンサムなのか。それは陸奥の藩閥政府に対する思いに見えるだろう。彼の『日本人』という文章の中に「政府数回の争論、数回の改革あり、其間固より得失ありと雖、常に政務の面倒を引起し、人民の迷惑を醸成し、政治の進歩を妨碍せしこと、枚挙に遑あらず、而して此不幸の争論を起し、国内の弊害を生ずるや、決して政府と各人民との間に生じたるに非らず、必ず薩長の争論に因るものにして、其大害の政府及国内一般に波及せしものなり、故に此国内に存する幸福を国内一般に被らしむること能はざるのみならず、僅に薩長の間に生じたる不幸を国内一般に受けしむるに至れり。・・・（中略）、願くは我が全国日本人、此国に対する義務あり権利あり、其義務を盡し、其権利を達し、独り之を政府即ち薩長の人に委せず、自ら此国の危難を分任し、其幸福を頌受し、苟も其責む可きは之を責め、其助く可きは之を助け、吾人の義務と権利を担当し、吾人の忠勇と志操を磨励し、苟も此国の人民たる本義を失はず、積年萎靡せる気力を更張し、現時此国の不幸を救済し、以て将来の幸福を招迎することに注意せば、是れ日本人の日本人たる所以なり。」と書いてある。

陸奥が志向していたのは国民が幸福を享受できる世界であったようだ。つまり、当時の自由民権運動と密接に関連していることになる。さらに薩長にみが国家の幸福を受け取る世界ではなく国民一般が幸福を享受できる世界にすべきといったということから、ベンサムの「最大多数の最大幸福」と同じような考えが見て取れる。獄中に於いて自ら蜂起することの愚を悟った陸奥は自らの意見に通ずることの多かったベンサムの考え方、そしてそれを翻訳することで一般人に間接的に自分の考えを広めようとしたのだろう。そしてベンサムの著作に触れた陸奥は伊藤の勧めもあり欧州遊学を果たす。シュタインに個人教授をしてもらう前に陸奥はロンドンに滞在し議会制民主政治や自由主義の理論について勉強している。ベンサムの著作を読んでいなければ自分の目でベンサムの母国イギリスに遊学しようとは考えなかったのかもしれない。シュタインに実際に教授してもらう前に自分の目で確認することで自分の考えを整理しておいたのである。

**4-4.シュタインとの関係**

　シュタインは、ドイツの法学者であり、伊藤博文が彼に個人教授を受けたこともあり、欧州遊学をした様々な日本人に対して法学について講義を行った人物である。伊藤が遊学した際には伊藤はシュタインを明治政府の顧問として招聘しようとしていたもののシュタインの病気と高齢のために固辞されたというエピソードも残っているが、陸奥はシュタインに個人教授を依頼した日本人の中で最も勉強熱心であったようで、陸奥がシュタインの講義を記録したノートが残っている。当時シュタインに師事した日本人は皆官職を持っており、投獄されていた関係で官職が無い状態でシュタインに接触を図った陸奥の存在は特異であったらしく、シュタインは陸奥が国家学の勉強をしたいと言ったときに理由について問いただしている。これは、「友人の伊藤伯が紹介状の中で述べていると思いますが、わたしがヨーロッパに来た目的は、ヨーロッパ諸国の憲法と行政を勉強するためです。(中略)私のような在野の一私人も、来るべき改革の成功を保証するために、それなりの貢献をすべきです。」(一八八四年十月十五日付「ローレンツ・フォン・シュタイン関係文書」、萩原延寿『陸奥宗光紀行』)という回答からうかがい知れる。

　シュタインの個人教授が陸奥に影響したこととは何であろうか。当然ながら政治学と国家学を習ったので政治面が挙げられるだろうが、萩原氏の言を借りると、「帰国後の自分の政治的将来に関心の焦点をあわせ、その目的に従って新しい知識の獲得につとめる」（『陸奥宗光紀行』）事をしたという。それまでの自分の自由主義的思想という自らの理想を持ちながらも、日本において自分が今後どうやって国家にかかわっていくかという現実に目を向け、その後の活躍の下地を作ったわけだ。法学、国家学は彼のその後の経歴に大いに役立ったであろう。

　さらに、間接的な影響になるが、シュタインに教授してもらうために宗光がウィーンに滞在したことそのものも宗光に影響するものであった。当時のウィーン公使西園寺公望との出会いである。二人とも胸中に自由主義を持ちつつ藩閥政府の中で活躍した人間である。陸奥が外務大臣在任中に一時休養することになった時、西園寺に任せているところからも二人の間にあった信頼がうかがえるだろうか。また、西園寺は陸奥が発刊した『世界之日本⁽⁾』という雑誌に寄稿しているなどのつながりも深い。

　これらから見えるように、シュタインの影響は、それまで明治政府に仕官していた時期はあるものの表舞台に立ったことはなく、交友のあった伊藤、井上らに比べどちらかというと雌伏していた感すらある陸奥が政治の表舞台に立とうとした時にそれに足るだけの政治に関する学を授けたことだろう。実際、帰朝した後に陸奥は弁理公使を始発点として順調に自らの地位を上昇させていくことになる。

**5.おわりに**

こうして見ていくと、それぞれの出会いが陸奥という人間に大きく影響を与えたことがわかる。坂本龍馬と出会ったことで陸奥は外国に対して目を向けていくことの重要性、そして自分がやりたいことを進めていくときにどう立ち回り、周りの人間を説得し動かしていくかを学んだ。伊藤博文は陸奥の人生における決定に力を貸し、また、政府の中で同輩として共に活躍していった。ベンサムの書物は陸奥が持っていた考え方と共鳴し、彼がイギリスに行くきっかけを作り、また、「最大多数の最大幸福」のために陸奥が国益重視で外交を行う下地となっていった。シュタインとの出会いはそれまで政府の中で表舞台に立っていなかった陸奥がその後に活躍するための学を与えた。

それぞれが陸奥宗光という人間を形作っていった。色々な側面があるだろうが、彼が『日本人』の中で語ったように、国民が国家の幸福を享受できるように日本が手に入れることができる最大限の国益を目指していった。自分が追放された時には思いもしなかっただろうが、陸奥宗光という人間は自分の勉強熱心さと重要な出会いによって弁舌が立つだけの周りとそりが合いにくい人物から交渉術を身につけ条約改正、日清戦争および三国干渉と日本の分岐点において外国と渡り合った日本史上の傑物に成長した。しかし、彼の考え方が人生において全て短期間に変化していったというわけではない。『世界之日本』に寄稿した文を見ているとあくまでも彼は藩閥主義者ではなく、国民が自分たちで政治を行える、つまり自由民権の時代が来ることが日本にとって重要なことであると考えていたことに変わりはない。

イギリス滞在時にイギリスにおいて議会制民主主義が根付くのに二百年かかった事を知り、日本で同じことを早急にはできないと悟って自らの自由民権的な考えにいったん封印は施した⁽⁾が、藩閥政府の中で政府のやり方に異を唱え、暴走を制御しようとしていた部分もあり、また、死の同年に発表された『古今浪人の勢力』に「自由民権を主張せる今の浪人諸子よ諸子の進行中には多少の反動を招き多少の障害を受くることあるべきも最後の勝利は必ず此に在て彼に在らざるなり苟も進歩変革が社会の常道たる以上は浪人は常に勝つ永久に勝つ浪人の勝たざる社会は滅亡化石の社会なり苟も天地の間一定の理法あるを信ぜんか勝利は終に浪人に在らん何ぞ屑屑然として藩閥の残肴冷杯に首を低れんや。」⁽⁾とあるように将来自由民権の社会が来ることを願い、自由民権家たちを勇気づけている。このことから、陸奥は坂本龍馬やベンサムの著書から自由民権という理想を固めていき、しかし、それが現状の日本では実現不可能なことを悟り、伊藤博文の紹介で知り合ったシュタインのもとで政治学という現実に立ち向かうための武器を勉強し、伊藤と共に日本の国難に立ち向かったと考えられるだろう。

陸奥は自分の生きている間に自分の理想が実現するとは思えず自由民権家としては活動しなかった。しかし、かといって自分の理想を捨てることはできなかった。そのため、陸奥は自分が政府に入り、活躍することで藩閥政治の時代と自由民権時代の橋渡しをしようとしたのだろう。そのためには日本が自由民権政治を行っても問題ないように日本の国力を高める必要がある。国力の低い国が民主的な政治を行っても、周辺国家に攻め込まれるなどの緊急事態に対応するには時間がかかってしまうのでその危険があると行いにくい。そして、国力を高めるには国益を増やしていく必要がある。この考えが欧州と渡り合い、日本の国益を獲得していった陸奥外交の原点なのだろう。

註

(1)この時に詩を残している。「朝誦暮吟十五年　飄身飄泊似飄船　他時争得生鵬翼　一挙排雲翔九天」

相当な決意を持って江戸に来たようである。なお、宗光はこの他にも多数の漢詩を残しており、多彩な一面を見ることができる。

(2)後の木戸孝允。薩長同盟締結時の長州側の代表。明治新政府では参議となるが台湾出兵時に抗議して辞職。その後、大阪会議を経て復帰するも病に倒れた。

(3)後の板垣退助。征韓論争で下野した後、民選議員設立建白書を出したり、自由党を結党するなど、自由民権運動を行う。岐阜で遊説中に襲われた際に残したとされる「板垣死すとも自由は死せず」の言葉は自由民権運動の旗印になっていった。

(4)後の伊藤博文。

(5)「当時政界の状況は余をして政府部内に立つよりも寧ろ野に下りて運動するの得策なるを感ぜしめたるより遂に自ら進みて免官を請願するに至りたるなり」（『伯爵陸奥宗光遺稿』）とある。陸奥は征韓論者ではなかったものの、政府にいると行動しづらいと感じたようだ。

(6)このことに関して、宗光は「此一事は余が半生の一大厄難にして自家の歴史上磨滅すべからざるの汚点なり余は他言するを欲せず」（『伯爵陸奥宗光遺稿』）と書いており、宗光自身がこの事について語るものは多くないが、漢詩として残されているものがある。

(7)「対議員政治のことに就ては余は内閣員と大に意見を異にし且つ将来の目的無くして議員を解散するの不可なることを痛論したるに拘わらず内閣の多数は全然これに反対せり故に当時に在りて余は既に辞職の旨を松方伯に公言し置きたり其後総選挙に際し政府は殆んど非法の干渉を為し天下の人心を激昂せしむるに至りたるが為め余は其非法干渉の最も不可なることを痛論したるに是れも亦内閣の容るゝ所とならざるに因り今は唯だ自決するの外無きを以て辞職したるなり」（『伯爵陸奥宗光遺稿』）

(8)原敬によると、「伯の肺患に罹りたるは殆んど三十年前に在ること既に記する所の如し然れども伯は米国在勤中重患に罹りたるを除くの外蒲柳の身を以て克く久しく激務に当り始終一貫倦怠を覚えず二十八年下之関講和談判の際流行感冒に罹り肺患再発したるも樽爼折衝頗る力む帰途舞子に静養中三国干渉事件起り病を押して京都に赴き事終わりて帰京す」（『陸奥宗光伯　小伝・年譜・付録文集』）とあり、もともと持病だった肺病が再発したものの三国干渉のために静養が十分にできず結果として西園寺公望に臨時で代行してもらうなどの期間を経て外務大臣を辞職したようだ。

(9)総理大臣として戦後日本の復興に大きな役割を果たした人物。岳父が牧野伸顕なので大久保利通の孫ということになり、藩閥政府が嫌いだった宗光との関係が気になるが、実は彼の実父の竹内綱が土佐立志社事件で宗光と共に投獄されており、そこで宗光とのゆかりがあった。

(10)「民族運動の自発性を認識できず、それが権力内部の勢力争いだとか、他国の使嗾によるものだとする見方は、その後長く日本の外交政策にも貫かれ、また日本人の思想に痼疾化して現在にいたる。陸奥外交は、はたしてこの痼疾化に無縁であったと言いうるだろうか。」（中塚明　『「蹇蹇録」の世界』）

(11)この時、三浦の警護には新撰組が当たっており、大騒動になっている。

(12)「維新の急務は到底開国進取の政策を執らるるの外他策なし而して其第一着は先づ当時大坂に在る所の各国公使に王政復古の実を告げ維新経論の主義を明らかにし以て大に外交を修むる事を努むるに在りとの意を以てせり岩倉公は総て伯の所論に首肯し尋で伯を挙げ外国御用掛を命じたり」（『陸奥宗光伯　小伝・年譜・付録文集』）

(13)三国時代に於いて後に呉皇帝になる孫権に仕えていた政治家。呉と蜀の同盟だと周喩が思い浮かぶだろうが、実際に同盟を結ぶための交渉は魯粛が行った。周喩の死後、彼の意志を継いで呉のために尽力した。

(14)208年の赤壁の戦いを前にして圧倒的な軍事力を誇っていた魏に対して呉が交戦することになり、蜀と同盟を結び共に対抗しようとしたこと。ちなみに、この当時は魏も呉も蜀もまだ国家としては存在しておらず、また、呉の孫権、蜀の劉備共に皇帝を名乗っていない。

(15)西郷隆盛。薩摩藩士の子として生まれ、薩長同盟時には薩摩側の代表を務めた。討幕運動に活躍したが、征韓論争に敗れ下野。その後薩摩の旧士族の窮状を見て西南戦争を起こすも敗れ、鹿児島の城山にて自決。現在でも鹿児島では敬愛されており、鹿児島にでは征韓論ではなく遣韓論であったとの考え方もされている。

(16)大久保利通。当初は公武合体運動を志向するが西郷らと共に討幕運動をすることに。新政府では主導的な役割を果たす。征韓論争では内政充実が先決であったとして軍の派遣を拒否。勝利し、内政充実のための政策を実行していく。しかし、1878年に紀尾井坂の変で死亡。

(17)ただし、木戸が亡くなったときに伊藤への書簡で木戸の死を悼むものを送っている。西郷に関しては西南戦争時に彼に味方をした旧士族を「腕力不平党」（『古今浪人の勢力』）とよび、大久保に対してはそもそも余り話が残っていないところからいい関係ではなかったと推察できる。

(18)この時の二人の働きぶりに明治天皇からこれを称賛する勅語が下されている。「清国曩ニ全権大臣ヲ簡派シ我ニ和ヲ請ハシム朕其ノ切実ナルヲ認メ乃チ卿等ニ授クルニ全権ヲ以テシ命シテ清使ト会商セシム卿等尊爼折衝数日ヲ費シ遂ニ善ク妥協ヲ得タリ今卿等カ奏スル所ノ梗概ハ朕カ旨ニ副フ洵ニ帝国ノ光栄ヲ顕揚スルニ足ル朕卿等の功ヲ偉トシ深ク之ヲ嘉尚ス」（『陸奥宗光伯　小伝・年譜・付録文集』）

(19)陸奥宗光が発刊した雑誌。この雑誌に陸奥はしばしば変名を用いて寄稿していた。藩閥勢力に対する批判をするときなどは自分の名前を出すことによる弊害を危惧したのだろう。

参考・引用文献一覧

・陸奥宗光伯七十周年記念会編『陸奥宗光伯　‐小伝・年譜・付録文集‐』（陸奥宗光伯70周年記念会発行、1966）

・中塚明『『蹇蹇録』の世界』（みすず書房、1992）

・萩原延寿『日本の名著　35　陸奥宗光』（中央公論社、1973）

・宇野量介『仙台獄中の陸奥宗光　陸奥宗光と水野重教』（宝文堂出版販売、1982）

・陸奥広吉『伯爵陸奥宗光遺稿』（岩波書店、1929）

・陸奥宗光『利学正宗』（薔薇社、1883）

※『蹇蹇録』は上記萩原延寿責任編集『日本の名著　35　陸奥宗光』に収録されているものに依った。